

「神が迎えてくださる」

—マタイによる福音書講解説教 89—

詩篇 第132篇 8節～12節
マタイによる福音書 第22章 1節～14節

説教 岡村 恒 牧師

「婚宴の席は客でいっぱいになった。」(10節)
主イエスは驚くようなたとえ話で、私たちが婚宴の席に招き入れる神の姿を描き出してくださいました。

1人の王が王子のために婚宴の用意をしました。王は、ただ一緒に喜ぶために人々を選び抜いて招きました。しかし、招かれた人々は来ようとはしません。王のことも、王子のことも気にかけていなかったことが明らかになります。しかし王はあきらめません。僕たちをもう一度遣わして丁寧に招きます。しかし彼らは自分の畑に行き、自分の商売に出ていきます。またほかの人々は、僕たちを殺してしまいます。

主イエスのたとえ話を聴くとき、私たちは思い違いをします。登場人物の中で一番共感できる人に自分を重ねて読み始めます。このたとえ話は一貫して、天とはどういうものか、この一点に光を当てて語ります。主イエスは、王がどんなお方が見よ、と呼びかけます。

この王は、ユダヤの人々が聞いてきた神の姿とは異なります。ユダヤの人々は婚宴に招かれるにふさわしい血筋であり、ふさわしい生活をしている、そう考えてきました。しかし主イエスのたとえ話は最初に招かれた人々の悲惨な最期を描きます。王は出会った人は誰でも婚宴に連れてきなさいと戸口を完全に開ききります。私たちはしばしば、このたとえ話は、ユダヤ人とキリスト者とを対比するように描いていると思って読んでしまいます。この最初の招待客に自分を重ねることができないからです。しかし婚宴にふさわしくない人々は、実は、私たちすべての人間でありました。

今日、ふさわしい、という言葉を使うと、多くの方が反発します。ありのまま、という言葉の方が好まれます。しかし、ありのまま、という言葉は聖書の信仰の世界、神の愛によって赦しを得るときにだけ響く言葉です。

祝いの婚宴を諦めることのない王は、この婚宴の席に道行く人々を次々と招き、婚宴の席を一杯になさいます。1人でも多くの方が神の国の祝宴に呼び集められ、喜びを共にすることが神の願いであるからです。

しかし、神が婚宴の席に出かけると礼服を着ていない人がいることに気づきます。この人は王の怒りをかい、手足を縛られて外の暗闇に放

り出され、泣き叫びます。なんとも理不尽な話です。この人物は、自分が本来、招かれざる客であったことを理解していませんでした。ほかの人々は招かれたことを喜び、自分にできる最大の努力をして来たのではないのでしょうか。招かれざる者が、本来そこにいていいはずのない場所に招かれてしまっている。そこに大きな喜びがあり、王の特別な思いがあることに、彼は気がつかなかったのです。

今週、灰の水曜日を迎えて、受難節の歩みを始めます。復活祭までの、日曜日を除く40日間、主イエスが負ってくださった痛みと苦しみに心を向けます。最も大事なことは、この王の婚宴に自分自身がふさわしくないということを思い知り、確認することです。私たちが神の子とするために、この婚宴に招き入れるために、主イエスは苦しみぬいて十字架に磔にされ、血を流し、身を切り裂かれて死んで下さいました。

私たちをお創りになった神は、まどろむことのない神です。復活された主イエスもまどろむことなく私たちを迎える準備をしておられます。「父のもとに行き、住まいを用意し、用意ができたらまた来て、あなた方を迎える」(ヨハネによる福音書 第14章2節、3節)と主イエスは約束されました。

いくつかのたとえ話は、世の終わりを結婚にたとえます。花嫁が花婿の到来を待ちわびて、夜通し灯りをつけて待っています。私たちも主イエスの来臨を心待ちにすればよいのです。主イエスは、私たちをふさわしい花嫁として整え清め、ふさわしい衣を着せて婚宴の席に招いてくださいます。

ただキリストの十字架の贖いによって、罪を洗い清められ、白い衣、婚宴にふさわしい衣を着せられる。それが洗礼によって起こります。そして、どれほど自分がふさわしくない者かを、くり返し思い起こしながら、天の国の祝宴を思い描きます。くり返しパンを受け、杯を飲み干しながら地上の旅を歩みます。

王の喜びと一緒に喜び、味わい、その日を楽しむために、私たちはこの地上の旅を歩んでいます。神がそのように招き、助け導いておられるからです。新しい朝、神の祝宴に顔を合わせて集う。その日を心待ちにしましょう。

(記 説教要約奉仕者)